

明治国家の栄光と悲慘

1、「大日本帝国憲法」発布（1889・2.11）

①帝国憲法はどのようにつくられたか

中心は長州出身の伊藤博文、秘密保持のため東京湾の孤島、夏島（現在は埋め立てで陸続き・横須賀市）にある伊藤の別荘で起草作業が行われた。君主権の強い南プロシア憲法が手本にされた。伊藤は岩倉具視宛ての書簡で、「英米仏の自由過激論者の著述のみを金科玉条の如く誤信し、殆ど国家を傾けんとするの勢」、つまり自由民権運動を批判している。天皇の命によって制定（欽定）し、下し与えられる（下賜）という性格の憲法だった。

この憲法では「第三条 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」となっているが、起草の中心になった伊藤博文は「皇太子に生まれるのは、全く不運なことだ。…大きくなれば、側近の吹く笛に踊らされねばならない。（『ベルツの日記』より）」と述べ、操り人形を糸で踊らせるような身振りをして見せたという。

②人々は憲法発布をどのように迎えたか

●内容を理解しないものが多かった。

「憲法発布」を「絹布の法被（はっぴ）」と誤解するものもいた。『ベルツの日』に「到るところ、奉祝門、照明、行列の計画。だが、滑稽なことは、誰も憲法の内容をご存じないのだ」とある。

●中江兆民は……「通読一遍唯だ苦笑するのみ」（幸徳秋水『兆民先生』）

③帝国憲法における人権規定はどうだったのか

「臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ」・「法律ノ範圍内ニ於テ」認められるもので、人権より法律や勅令が優先することになる。結局、治安維持法などで何の人権も保障されなくなった。

④育鵬社版歴史教科書は帝国憲法をどう評価しているか

「アジアで最初の本格的な近代憲法の成立を祝い、各地で祝賀行事が行われ、自由民権派も新聞も憲法発布を歓迎した。」「国民は法律の範囲内で、言論や集会、信仰などさまざまな自由が保障されるとともに、納税、徴兵などの義務も負いました。」などと積極的に評価している。

また、教育勅語の発布についても大きく取り上げ、「国民の務めとして、それぞれの立場で国や社会のためにつくすべきことなどを示し、その後の国民教育の基盤になりました。」としている。さらに、この教科書は教育勅語の一部を現代語訳で紹介している。特に教育勅語の「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シテ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」というところを「もし、国や社会に危急のことがおきたならば、正義と勇気を持って公のために働き、永久に続く祖国を助けなさい」と現代語訳している。後半の「天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」とは「永遠に続く皇室の運命を助けるようにしなさい」つまり天皇のために命を捧げなさいという意味なのを、天皇を外して巧妙にごまかしている。

2、明治の外交—すべては朝鮮半島をめぐる

①「日朝修好条規」(江華島条約 1876・明治9)

明治政府の大久保利通や伊藤博文らは内地優先を主張、征韓論を唱えた西郷や板垣は下野した(明治6年の政変)。ところが、その2年後に、明治政府は朝鮮に対して江華島事件を起こし、翌年には日朝修好条規を締結。

かつて日本に来航したペリーが武力を背景に圧力をかけながら、日本を交渉のテーブルにつかせ、要求をのませた砲艦外交に学び、今度は日本が朝鮮に対して行っている。日朝修好条規は日本が欧米に締結させられた不平等条約と同じように、領事裁判権を認めさせ関税自主権を与えないものであった。

②日清戦争(1894~95)

日本と清のどちらが朝鮮に対して優位に立つかが争われた。

※日清講和条約(下関条約) わざわざ全権の伊藤博文の故郷で締結している。

まず、朝鮮の完全独立を確認している。内村鑑三は、このことで日清戦争を正義の戦いだと主張したが、実際には朝鮮を清の影響から切り離し、日本が支配する基礎作りというものであった。(内村鑑三は日露戦争については、非戦論に転ずる。)また、台湾や遼東半島を獲得したが、遼東半島はロシア・フランス・ドイツの三国干渉により返還。

③日露戦争(1904~05)

朝鮮半島をめぐる日露の対立を決着させる戦争。ロシアの拡張を恐れるイギリスと利害関係が一致(日英同盟)、さらに英米から巨額の外資も調達しながらの戦争。日本に戦争継続能力なく、アメリカの仲介で講和(ポーツマス条約)。日清戦争とくらべて得られたものが少なく、反対する民衆によって日比谷焼き討ち事件なども起こった。

しかし、朝鮮への日本の優越的地位は確保し、1910年には韓国併合となる。

この時期、夏目漱石は『三四郎』の中で、『「…是から日本も段々発展するでせう」と辯護した。すると、かの男は、すましたもので、「亡びるね」と云った。』として日本の「近代化」を批判している。

戦争末期、千葉の戦車隊で陸軍少尉だった司馬遼太郎は、本土決戦で上陸してくる米軍を迎え撃つ際、「避難して来る日本人はひき殺して行け」と上官が言ったのを聞き、「いつから日本人はこんなバカになったのか、昔の日本人はもっとまじだつたに違いない」と思い、小説『坂の上の雲』を書き始めたという。司馬の歴史観は「明るい明治、暗い昭和」だったが、戦争賛美と受け取られるのを恐れて、生前は映像化を許さなかった。

3、「富国強兵」「殖産興業」のかけ声の下で

①国家資本を投下した「官営工場」方式

富岡製糸(明治5年)のように、全部税金でつくる。江戸時代と変わらぬ重税が原資。それを、人脈や政治献金で政府や政治家と結びついた政商に安価で払い下げた。(富岡製糸も1893年に三井に払い下げられた。)

②国策遂行のために企業を擁護

足尾銅山の場合も、鉱毒被害民の犠牲を無視した。

③地主制（半封建的地主小作関係）の下、余剰労働力が都会へ

小作人が地主から土地を借りて耕作する。口頭契約が多く、地主が一方的に土地を取り上げたり、小作料を値上げできる。小作人は貧しく厳しい労働を強いられた。

その農村は都市部の低賃金労働者の供給源、不況で失業すればまた農村に帰る。つまり失業者を農村が吸収する。そういう仕組みが社会の矛盾を顕在化させない役割を果たした。「軍隊はいい所でがんした」（大牟羅良『ものいわぬ農民』）という農民出身の元兵士の証言は、貧しく厳しい農村の生活の一方で学歴に関係ない軍隊での「平等」な扱いを物語る。

④圧倒的な農村の貧しさと都会では労働者の低賃金＝国内市場の狭さ

国内需要が不足するため、海外市場の拡大が必要となる。そのために軍事力を背景に海外に侵略する。だから富国と強兵はウラとオモテ、車の両輪のようなもの。

（まとめ 設楽春樹）